

中学校社会科(歴史的分野)における埋蔵文化財を活用した ESD の授業開発

—中学校 1 年生社会科歴史的分野の実践から—

井上岳海

(奈良教育大学 専門職学位課程 (教職大学院))

中澤静男

(奈良教育大学 ESD・SDGs センター)

Developing ESD Lessons Using Buried Cultural Properties in Social Studies (Historical Field) of Junior High School:
From the Practice of Social Studies and History for First-grade Junior High School Students

Takemi INOUE

(Professional Degree Program (in Education), Nara University of Education)

Shizuo NAKAZAWA

(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

要旨：2017年3月に告示された学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」が明記されたことを受けて、中学校社会科(歴史的分野)における埋蔵文化財を活用した ESD(持続可能な開発のための教育)の授業開発を行うことを目的とした。これまで行われてきた埋蔵文化財を活用した授業実践を、新宮・中澤(2023)の教科書分析に用いた基準を用いて見てみると、ほとんどが、埋蔵文化財の価値を理解させることだけにとどまっていることが明らかとなった。つまり、埋蔵文化財を活用して、持続可能な社会の創り手を育成することは考えられていなかった。そこで、筆者は、埋蔵文化財の分析から古代人の精神状態を明らかにしようとする「認知考古学」と中澤(2021)の「持続可能な社会づくりの必須条件」を援用することで、持続可能な社会の創り手を育成することができると考えた。本稿では、埋蔵文化財を通して、持続可能な社会を実現してきたであろう古代の人々の工夫や思いに、生徒が共感することで、現代の社会課題の解決策を考え、行動化を促すことにつながる授業を提案する。

キーワード： ESD Education for Sustainable Development
社会科 Social Studies
埋蔵文化財 Buried cultural properties
認知考古学 Cognitive archaeology

1. はじめに

2015年9月の国連総会で、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、持続可能な開発目標(以下SDGs)が掲げられた。ここでは、17の目標と169のターゲットを2030年までに、世界全体が取り組む目標としており、達成年が迫ってきている。

2017年3月に告示された学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と明記され、持続可能な開発のための教育(以下ESD)が新学習指導要領の基盤的理念として位置付けられた。

そのような中であって、我が国が提唱した ESD の更なる取り組みを促すため、2019年12月に行われた国連総会において、「持続可能な開発のための教育：SDGs 実現に

向けて(ESD for 2030)」という新たな国際的枠組みが決議、採択された。そこでは、「国連持続可能な開発のための10年(2005～2014年)」(DESD)の後継プログラムである「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」の5つの優先行動分野(1政策的支援、2機関包括型ホールスクールアプローチ、3教育者、4ユース、5地域コミュニティ)を定めた。「ESD for 2030」では、DESDとGAPを基盤にしながら、様々なステークホルダーで構築される一つの包括的ネットワークの構築や、優先行動5分野のパートナーネットワークを越えた横断的活動・協力の強化を奨励しているなど、ESDの推進を求めている。

一方で、日本では、歴史や伝統工芸といった文化的分野の関心は低調で、日本の古き良き文化の持続可能性が危ぶまれている。その中には、文化財も含まれており、特に、考古学が対象とする埋蔵文化財においては、一般人、特に若者世代からするとかけ離れたものであり、その重

要性が理解されていない。そのため、文化財行政において文化財の保存と活用については、今後考えていかなければならない課題となっている。

2. 研究の目的

近年、考古学が対象とする埋蔵文化財が世界遺産に登録されたことや、2023年度に行われた国内最大級の円墳である富雄丸山古墳第六次調査から東アジア最大級の鉄剣（蛇行剣）と、これまでに例を見ない龍文（だりゅうもん）盾形銅鏡が出土し、国宝級と称され多くのメディアに取り上げられたことから、埋蔵文化財に対する一般の人々の関心が高まりつつある。

また、令和4年度に文化庁によって行われた文化に関する世論調査で直接鑑賞した文化芸術のジャンルの内、「歴史的な建物や遺跡」を鑑賞した人々の割合が他ジャンルよりも高くなっている。しかしながら、年齢別に見てみると若者よりも中高年世代の方が高くなっており、若者世代が興味を抱いているとは言い難い状況である。こうした、若者世代が地域の埋蔵文化財にどのようにして関心を持ってもらうかが問われている。そのような背景から、各地域の埋蔵文化財センターや調査機関が、生徒向けに行う、出前授業や体験学習、そして、教員研修など学校教育と連携した取り組みを行うようになってきている。

また、新学習指導要領社会編における歴史的分野の目標として、三つが示されている。特に(3)には、「歴史に関わる諸事情について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追及、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を涵養される我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚、国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとする大切さについての自覚などを深め、国際協調の精神を養う。」が掲げられている。下線部等から、埋蔵文化財を含む文化遺産を尊重しようとするこへの自覚が述べられており、文化遺産の価値を伝えることが、教育において求められていることが伺える。

さらに、これまでの学習指導要領のなかでも「民俗学や考古学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの施設を見学・調査したりするなどして具体的に学ぶことが出来るようにすること」という内容が示されており、実物に触れたり体感することの重要性が強調されている。

一方で、「持続可能な社会の創り手の育成」が現行の学習指導要領（告示）の前文で示され、社会科においては地理的分野と公民的分野にのみ「持続可能な社会」といった文言が含まれており、歴史的分野では、直接的な文言として含まれていない。しかし、歴史的分野においても学習指導要領の前文に示されている限り、持続可能な社会の創り手の育成を目指さなければならない。

本稿では、埋蔵文化財のもつ価値を理解させることに

留まるのではなく、埋蔵文化財を通じた学びから、持続可能な社会の創り手の育成につながるような、ESD社会科の授業案を開発することを目的とする。

3. 研究方法

本研究では、持続可能な社会の創り手の育成を見据えた授業として、自身の授業実践での生徒の反応やアンケート調査の結果を踏まえて、埋蔵文化財を活用したESD社会科の授業案を提示する。そのため、以下の二つを検討する。第一に、これまで行われてきた埋蔵文化財を活用した授業実践をESDの視点から検討する。第二に、授業実践と生徒のアンケートの分析である。

第一は、これまで行われてきた埋蔵文化財を活用した授業実践を検討するにあたり『歴史地理教育』で縄文・弥生・古墳の各時代の特集が組まれており、そのなかにある実践報告を、新宮・中澤（2023）の「文化財を活かした小学校におけるESD社会科創出の一方法—小学校4年生社会科「県内の文化財や年中行事」の実践から—」で教科書分析する際に用いた指標を援用して、検討する。ここでの文化財の位置付けは文化財保護法に基づいた、有形文化財・無形文化財・民俗文化財・記念物文化財・伝統的建物群の5種類であり、埋蔵文化財が含まれていない概念であるということは留意しておかなければならない。しかしながら、田淵・中澤（2007）で示されている世界遺産教育の概念的枠組みが文化財にも援用できることとして、これからの文化財学習の方向性を示していることに意義があり、これは埋蔵文化財に当てはめて考えることも可能であると考えられる。

第二は、教職大学院の探究実習で中学校一年生を対象に、日本の旧石器時代から古墳時代の単元の授業をする機会が得られたことから、授業実践とアンケート調査の分析を行う。分析を行う理由として、実習はかなりの制約が伴うため、ゲストティーチャー（以下、GT）を招くことや、校外に出た学習が行うことは現実的に不可能であったからである。その中でも、身近な遺跡の紹介や、埴輪や土器などの生の資料を提供するように努力した。また、GTを呼べない代わりに、自身が考古学という学問を学び、発掘調査の経験があったことから、実体験などを交えながら話すことも意識した。

授業方法としては、個人で考える場面と、他者と考える場面の双方を取り入れ、時には、ゲーム感覚で楽しく体験的に学べるような授業展開を試みた。

さらに、単元が始まる前と後で埋蔵文化財に対する価値観の変容を見るために、Google formsを活用してアンケート調査を実施した。

第一と第二の検討を踏まえながら、中澤（2021）の「歴史文化遺産が示す持続可能な必須条件」と「認知考古学」という、遺物や遺跡の分析から古代人の精神状態を明らかにしようとする方法を援用し、古代から現代に至るま

での人間の考え方や価値観を学ぶことで、持続可能な社会の創り手の育成につながると考える。これらをもとに、埋蔵文化財を活用した ESD 社会科の授業の提案を行う。

4. 埋蔵文化財の活用と実践の検討

4. 1. 埋蔵文化財と ESD のつながり

ここでは、埋蔵文化財と ESD の接点を探ってみよう。埋蔵文化財とは、文化財が土地に埋蔵されている状態のことを指し、古墳や集落跡の遺跡や、それらから出土する土器や埴輪がそれにあたる。つまり、当時の生活様式や文化などを知ることができる手がかりである。また、人間は社会や文化、自然環境の変化に適応して、暮らしぶりを変えながら生きてきている。そこには時代に応じたパターンがあり、これまでの発掘調査や考古学の研究で明らかにされてきている。

以上のことから、今の日本や世界が持続しているのも、当時の人々の様々な思いや工夫が伝承されてきたからだと見ることができ、当時の人々は世代間の公正を意識していたことが想定できる。そうであるならば、これから生きていく若者や、将来世代の人々がよりよい社会で生きられるようなシステムを、埋蔵文化財を活用した授業をきっかけとして考えていくことが必要だろう。そのシステムを考えるにあたっては、世代間の公正だけではカバーできるものではなく、ESD の考え方を踏まえた授業作りをすることが必要である。

しかしながら、これまでに埋蔵文化財と ESD を結びつけた論考は筆者が管見する限り見られないが、世界遺産や文化遺産と ESD を結びつけた論考は少数ではあるが存在している。特に、世界遺産と ESD のつながりを見出そうとした田淵（2009）の研究は先駆的である。田淵は、世界遺産教育の概念を3つに整理している。それは、①世界遺産についての教育②世界遺産のための教育③世界遺産を通しての教育である。また、この分類が世界遺産に限定した概念ではなく、地域にある文化遺産や自然景観にも応用することができることと述べており、歴史文化遺産を活用した ESD の授業の新たな方向性を導き出している。

次に、田淵の考え方を援用して、中澤（2009）が、2007 年からこれまで行われてきた奈良市の世界遺産教育を ESD の観点から捉え直し、世界遺産学習の目標を以下のように示した。

【世界遺産学習の目標】

- ・奈良のよさを理解し、奈良に愛着を感じ、奈良を誇りに思う。
- ・文化遺産の創造や継承、またその保護、文化遺産を取り巻く自然環境の維持に、長い年代を通じて取り組んできた人々の思いや努力を共感的に理解し、文化遺産や自然遺産を尊重する。
- ・空間的また歴史的に奈良の文化財や自分の生活を捉えなおし、国際理解や環境、平等の現代的な諸課題について意欲的に学ぶ。

多くの世界遺産や文化財を活用した授業は、世界遺産や文化財が持つ価値だけに気づかせることがほとんどであるように感じるが、この目標を見る限り、文化財の価値ばかりに焦点を当てていない。むしろ、文化財を守り伝えてきた人々の思いや努力に共感させることや、自分自身の生活を見つめなおし、現代的な諸課題にも気づかせることを強調している。

次に、以上のことを踏まえて 2007 年に文化庁によって報告された「埋蔵文化財の保存と活用（報告）」を見てみたい。冒頭部には、「埋蔵文化財は、国や地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで、欠くことのできない国民の共有財産である。」と記されている。これは、世界遺産の概念と共通している。しかし、世界遺産や埋蔵文化財を除いた文化財と大きく異なるのは、土地に埋蔵されていることである。そのため、ほとんどが普段の生活の中で、目の目を見ることはなく、埋蔵文化財が持つ価値を感じ取ることは難しい。その価値を一般に伝えるために、埋蔵文化財を積極的に保存し活用することを目的として、地域づくり・ひとづくりに焦点を当てた取り組みを行うように示されている。一例として、埋蔵文化財が学校教育において大きな可能性を秘めた教育的資産でもあることを踏まえ、埋蔵文化財行政と学校教育が連携をすることが重要であるとされ、埋蔵文化財を活用した様々な活動を通して、異世代交流や地域社会での交流の機会の提供になるとしている。

以上の埋蔵文化財行政側からの保存と活用の提言では、学校教育との関係を構築することの重要性と埋蔵文化財を活用した活動が、交流の機会を提供していると述べられているものの、どのような関係構築をしていくか、どのように交流の場を提供するのかといった具体的なことが述べられていない。また、埋蔵文化財の保存と活用が、埋蔵文化財の価値を伝えていくことだけにとどまっておらず、埋蔵文化財を通して、持続可能な社会に向けた生徒の価値観の変容や行動の変革にはなっていない。田淵の世界遺産学習の分類に従えば、知識や、その価値に気づかせることを重要視した「世界遺産についての教育」に該当する。

「世界遺産のための教育」や「世界遺産を通しての教育」が該当しないのは、推測するに、ひとつは、埋蔵文化財行政側が考えることであると捉えているからだろう。もう一つは、埋蔵文化財は、先述した通り遺跡や遺物から読み取れる事実とその価値を重要視する傾向にあり、知識・理解に留まっているからだと考える。

しかし、埋蔵文化財は、過去の人々の思考や判断に基づく行動または工夫を、遺構や遺物を通して伝えてくれている。そこから、当時の人々の努力や工夫、そして思いに気づくことで、遺跡が残っている重要性やその価値に気付いたりする。例えば、日本で最大の前方後円墳とされる伝仁徳天皇陵は 486 メートルと圧巻で、大林組による出している仁徳天皇陵を築造するのにかかった時間

と人の試算によれば、15年8ヶ月をかけて約680万人の人々が関わっているとしている。古墳は、様々な役割の人々の知恵や工夫によって、築造したものであると共に、自分達のリーダーを埋葬した事実から「大事な場所」という感覚が醸成されたであろう。だからこそ今まで古墳が残されてきているのであって、決して奇跡的に残った人工物ではない。

また、認知考古学研究を牽引する松木(2013)によれば、認知心理学・進化生物学・神経科学などで明らかにされつつある、ホモ・サピエンスが生得的に共有する普遍的認知の構造や特性を照合先として物資資料の意味づけや解釈を行うことができるとしている。つまり、特定の感情が、ホモ・サピエンスに共通する普遍的認知であるという定理が成り立つ限り、物である考古資料から人間の思考や心理にせまることができる。

さらに、長谷川(2016)は、進化心理学から、ヒトの社会性を明らかにしている。ヒトには、他者の情動に同調して同じ感覚を持ってしまう、「情動的共感」と他者の状態を理解しつつも、他者とを分離した上で、他者に共感する「認知的共感」があり、これらによって、社会的な問題解決をはかることができると述べている。

これらを踏まえれば、過去の人と現代人の根本的な価値観は変わらないことに気づく。そのため、過去の人々も現代人も持続可能な社会を願い、より良く生きていこうとしていることは共通しているだろう。それを実現するために様々な工夫をしてきたことは、生活に使われた遺物や遺構から読み取ることができ、紛れもない事実である。そうであるならば、埋蔵文化財を通して、当時を生きた人々の思いと、その思いを繋いできた次世代の人々の思いが、現代人も変わらない価値観であるということに気づくことで、自分自身と向き合い、価値観を捉え直すことに繋がるのではないだろうか。つまり、ESDの目標である価値観の変容を促すのに、埋蔵文化財を活用することが効果的だと考える。

4.2. 埋蔵文化財と世界遺産

世界遺産は顕著な普遍的価値を持っていなければならず、ユネスコでは、評価基準の適応、完全生・真実性の証明、万全の保護措置の3つの柱によって示す必要があるとしている。

では、近年、世界遺産登録された埋蔵文化財にあたる百舌鳥・古市古墳群や北海道と北東北の縄文遺跡群の世界遺産の登録の際の該当基準を見てみると、前者は、2019年に(iii)「古墳は日本各地に16万基存在するものの、日本古代の古墳時代の文化を代表し、また類まれな物証を提供するものが百舌鳥・古市古墳群である。45の構成資産は、この時代の社会政治的構造、社会的階層差および高度に洗練された葬送体系を証明している。」と(iv)「百舌鳥・古市古墳群は、古代東アジアの墳墓構造のひとつの顕著な類型を示すものである。古墳、およびその有

形の属性である土像、濠、幾何学的な段築をもち、石で補強した墳丘は、この歴史的に重要な時代における社会階層の形成のうえ顕著な役割を果たしたものである。」によって評価され、登録されている。

後者は、2021年に(iii)「先史時代における農耕を伴わない定住社会及び複雑な精神文化を示している。」と(v)「定住社会の発展段階や様々な環境変化への適応を示している。」によって評価され、登録されている。

【世界遺産認定の評価基準の内容(一部抜粋)】

- (iii) 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在(少なくとも希有な存在)である。
- (iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。
- (v) あるひとつの文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。

両者とも(iii)の評価基準が与えられているが、古墳は地上に顔を出していることから物証を提示していることは明らかである。

一方で、埋蔵文化財が主対象とする文字資料が残らない先史時代の社会構造や、精神文化を明らかにすることは困難であるが、長年にわたって積み重ねられてきた調査や研究の成果が、物証として評価されている。

そうであるならば、過去の人々が作成し、使用した土器や人が住んでいたとされる遺跡を含んだ埋蔵文化財は、精神文化や社会構造を表しているのだから、そこから現代人が学ぶことで、自身の精神や現代の社会構造を考えることにもつながる。さらには、現代的諸課題について考えるきっかけにもなり得る。

4.3. 埋蔵文化財を活用した実践とESDの関連

これまで、埋蔵文化財を活用した実践報告はほとんど見られないなか、歴史地理教育学会が発行する『歴史地理教育』にはわずかであるが縄文・弥生・古墳時代の実践が記載されていた。そのなかでも、埋蔵文化財と繋がりのある実践報告の分析を行なったのが表1である。中学校の実践のみでは、僅かであるため、学校種を限定せずに分析した。

表1では、先述した理由から、新宮・中澤(2023)の教科書分析の際に用いた指標を援用して検討した。筆者は、この指標に埋蔵文化財の概念も含まれると考えているため、「文化財」という広い概念ではなく、「埋蔵文化財」という狭い概念に置き換えて検討し、両者を合わせることによって真の意味での「文化財」を通じたESD社会科が開発できると考える。

中学校「誰が環濠を掘ったのか?」では唐古・鍵遺跡を活用した授業を展開している。そこでは、弥生時代で唐古・鍵遺跡を教えるパターンと弥生時代を唐古・鍵遺跡で教えるパターンがあり、両方を交えながら弥生時代の単元を構築しているが、いずれにしても、弥生時代

表1 新宮・中澤（2023）の「文化財を活かした小学校における ESD 社会科創出の一方法—小学校 4 年生社会科「県内の文化財や年中行事」の実践から—」をもとにした実践の検討

学校種	実践報告	埋蔵文化財の知識や価値に気づかせる（世界遺産についての教育）	埋蔵文化財の課題を理解したり、接する態度を学ぶ（世界遺産のための教育）	埋蔵文化財を切り口にして、国際理解や地球環境の保護などを学ぶ（世界遺産を通しての教育）	発行年
小学校	縄文のむらから古墳のくにへ	○	×	×	2023
小学校	埴輪から始める古墳時代の授業	○	×	×	2018
小学校	弥生時代はどのように始まったのか	○	×	×	2011
中学校	弥生時代から古墳時代の授業づくり	○	×	×	2023
中学校	誰が環濠を掘ったのか？	○	×	×	2011
高校	見る古墳から造る古墳へ	○	○	×	2013

の概念把握や唐古・鍵遺跡について理解することに重点が置かれており、遺跡の保存を考えることや、遺跡を切り口にして、国際理解や平和について学習するところまでに至っていない。特に弥生時代は、縄文時代とは社会が大きく変化し、争いが増加している。それは、唐古・鍵遺跡にも反映されており、多重の環濠がその証拠である。それらを通して、平和の学びにつなげることは可能である。

一方で、浜田博生（2013）が「見る古墳から造る古墳へ」という高校の実践を行っている。まず、地域にある古墳を築造するのに、ヒロ（被葬者たる首長の身度尺）というものさしを利用して、緻密な企画で作られていることを学芸員さんから学ぶ。ここでは、古墳の築造を学ぶことで知識や古墳の「すごさ」、つまり、価値について気づかせていた。また、多くの実践はここまでの取り組みで留まるケースが多いが、この実践はここで留まるのではなく、古代人の労働を体験するために高校生と地域住民が共に、古代人になったつもりで、現代の運動場いっばいに前方後円墳の地割り体験に取り組んでいる。この体験を行うことで、古代人の苦労や努力に気づき、もっと身近な古墳について学ばなければならないという、遺跡の保全や、遺跡に対する接し方を学ぶことができていた。

しかしながら、高校の実践においても、埋蔵文化財を切り口にして、国際理解や地球環境の保護などを学ぶところまでには至っていない。高校の実践では、高校生で

けでなく、地域の人々が関わっていることから、古墳の地割り体験と古墳時代の古墳造りが人と人のつながりや古代人の苦労や努力によって、古墳が完成していることを理解している。そこから、協働することの重要性やパートナーシップを学ぶことができる。

以上では、埋蔵文化財を活用した授業実践について持続可能な社会の創り手の育成に繋がるような実践の観点から検討した。どの学校種においても埋蔵文化財の知識や価値に気づかせることはできているが、高校の実践をのぞいては、埋蔵文化財の課題や、保存について学ぶことを中心とした「埋蔵文化財のための学習」は行われていなかった。さらに、埋蔵文化財を切り口にして、国際理解や平和、地球環境の保護といった、現代的諸課題について学ぶことを目的とした「埋蔵文化財を通しての学習」は、全学校種で行われていなかった。それは、歴史学習は、その時点で起きた確定した事実であり、現代と比較して考え、生徒自身の思考に基づく社会的な判断を求める学習が成立しないという考えからからだろう。

しかしながら、中尾（2011）によれば、「歴史とは、その時点・その場面ごとの人々の、思考や判断に基づく行動の記憶の蓄積である。その時代に身を置いて見ることで、むしろ生徒は現実の社会的課題に直面し、自らが主体となって思考・判断する機会を得ることができる。」としている。筆者もこの立場であり、先述したように埋蔵文化財は、過去の人々の思考や判断が反映されており、当時の人々の心を読み取っていく中で、現代と過去の価値観の共通性と共に現代課題に気づき、解決の糸口を過去の事象から考え、行動変容を促すことができる。

5. 授業実践とアンケートの分析

5.1. 授業実践の分析

筆者は、ここまで述べてきたことを踏まえて、教職大学院の実習で奈良県生駒市の中学校1年生を対象に、授業実践を行った。筆者が思い描いた授業実践ができたとは言い難いが、自身の埋蔵文化財に関わる経験や、地域の埋蔵文化財を見せることや、直接的に触れさせることはできたことは大きな意義があった。

本単元は、今から約13000年前の縄文時代の生活や文化に始まり、弥生時代に入ってからの農耕の広まりや生産技術の発展、東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目しながら、縄文時代から古墳時代への移り変わりを考古学の成果と生の資料である埋蔵文化財を通して理解し、持続可能な社会の実現のために、現代的課題を追求し、課題解決に向けた価値観の変革と行動変容を促すことを主な狙いとした。

単元を展開させていくにあたって、日本列島が形成される前の旧石器時代から稲作を受容し、朝鮮半島との交流が活発化した古墳時代までを、気候変動と国際交流に焦点を当てた。

- (1) 日時及び授業学年
令和5年10月1年(3学級)
- (2) 単元名 教科
「日本列島の誕生と大陸との交流」
社会科(歴史的分野)
- (3) 単元目標
- 日本列島における各時代の生活の特徴とムラからクニへ変化し、大和政権による統一の様子を東アジアとの関わりをもとに、東アジアの文明の影響を受けながら国家が形成されていったことを理解している。
(知識・理解)
 - 当時の環境、農耕の広まりや生産技術の発展、東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目しながら、事象を相互に関連付けるなどして、古代社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。
(思考・判断・表現)
 - 古代までの日本について、現代まで持続している事物の気づき、よりよい社会の実現を視野にそこに見られる課題を主体的に追究しようとしている。
(主体的に学習に取り組む態度)
- (4) 学習展開の概要 授業時数 全5時間

次	時	ねらい・学習活動	評価の基準及び評価方法
二	1	○旧石器時代と縄文時代の暮らし 日本列島の誕生を理解し、旧石器時代・縄文時代の生活の特徴を本物の土器や石器から読み取る。	日本列島の誕生が温暖化の影響であることを理解した上で、旧石器・縄文時代の生活の特徴を本物の土器や石器から読みとり、表現している。 【思考・判断・表現】
	2	○弥生時代の生活と中国との関係 弥生時代の生活の特徴を捉え、稲作の伝来によって争いが増えたことを理解する。	弥生時代の生活の中に稲作があることに気づかせ、稲作の伝来によって争いが多発したことを理解している。 【知識・理解】
	3	○ムラからクニへ(邪馬台国の成立) 弥生時代のムラからクニへ拡大していく過程をゲームを通して班で協力しながら体感する。	ムラからクニに変化する過程をゲームを通して班で意見交換などを、主体的に行うことができている。 【主体的に学習に取り組む態度】
	4	○大王の時代 古墳の特徴や構造を捉え、大和政権の成立・拡大を古墳の分布図や考古資料を活用しながら理解する。(本時)	古墳の分布図や考古資料などを活用しながら大和政権の成立・拡大を理解している。 【知識・理解】
	5	○渡来人がもたらした物・文化・技術 中国や朝鮮半島の交流によってもたらされた物・文化・技術を考え、現代につながるものがないかを考える。	中国や朝鮮半島の交流によってもたらされた物・文化・技術を考え、現代のつながりを見出そうとしている。 【思考・判断・表現】

気候変動は、旧石器時代から縄文時代にかけて温暖化が進行していることに着目させ、生活や文化が変化していることに気づかせ、温暖化がもたらす影響を考えさせるようにした。そこで、日本列島が形成していくのを捉

えさせるために、旧石器時代から縄文時代にかけて気温が上昇していることがわかるグラフを見せることで、温暖化が起きていることに気づかせた。さらに、温暖化が進行する前後の生活様式を生活で使用された道具や住居をもとに、比較することで、気候変動によって生活様式が一変することを学びとっていた。授業時の生徒の感想から現在起こっている温暖化の影響と重ねて考えており、「旧石器時代から縄文時代にかけての温暖化は、生活が良くなっているけど、現在は温暖化が進行しすぎて暑くなり、生活しづらくなっている気がする。」という感想があった。このことから、授業を通して歴史の事実のみならず、地球温暖化といった現代的諸課題にもつなげて考えることができおり、埋蔵文化財を通じた学習を行うことができた。

一方で、国際交流については、古墳時代に渡来人がもたらした物・文化・技術に着目した。奈良県や大阪府をはじめとした近畿地方には、考古学の調査成果から渡来人がもたらした物や文化を受容していることがわかっている。例を挙げれば、鉄、須恵器、かまど、漢字、仏教などである。また、これらは教科書や資料集に掲載されていることから、まず、渡来人が日本にもたらした物と文化は、どんなものがあるかを読み取らせた。その後、抽出した物の中から、現代の日本においても使用しているものや、今でも残っている文化はないかを問うと、漢字や仏教が残っていることにすぐに気がついてきた。さらに、須恵器を焼く登り窯は、今でも焼き物を作るときに使用されていることや、鉄を加工する工場や鉄を使用した製品を見せることで、渡来人がもたらした様々な物や文化が現代でも使用されていることに感銘を受けていた。そして、現在の日本でも韓国からK-POPといった様々な音楽文化や食文化が入っていることを指摘すると、生徒は、今も昔も朝鮮と交流していたことを理解していた。

他方で、最後の授業で、なぜ1500年以上前のものや文化が現在まで残っているのかを考えさせたが、ほとんどの生徒が考えることができていなかった。その理由は、この問いを考えさせるには、これまでの授業の中で、遺跡や遺物が保存されてきた経緯や、当時を生きた人々の工夫や、思いに迫りきれていないからだと考える。

5.2. アンケートの分析

本単元の授業を行う前後に、生徒の価値観の変容をみるために1年生の全学級(114人)を対象にアンケート調査を行った。その結果が図2である。①～④は授業実践前後の変化を矢印で表しているが、⑤と⑥は授業実践後のみの調査結果である。アンケートの結果から、授業実践の前と後で大きな変化があったことが確認できた。

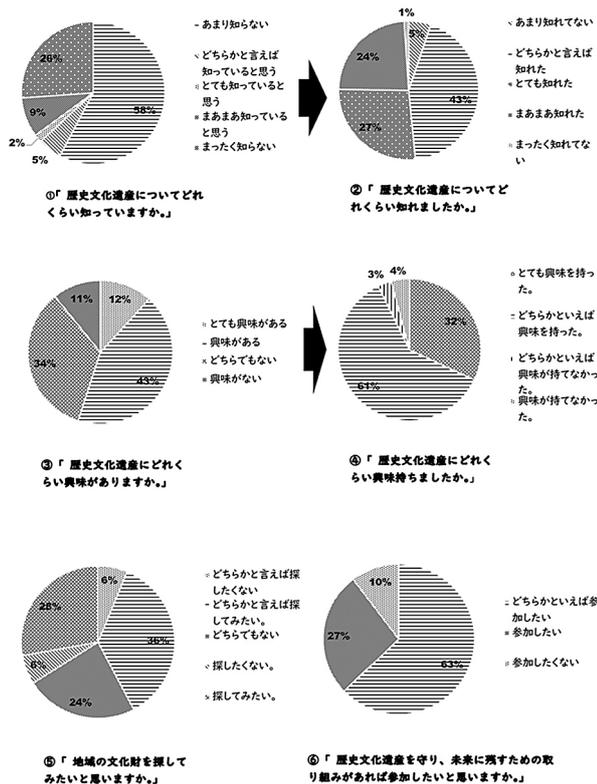


図2 アンケート調査の結果

まず、①と②から地域の歴史についての知識の深まりが見られた。授業前では、自分の住む地域の歴史について全く知らない、あまり知らないと答えた生徒が9割近くであったが、授業後には、自分の住む地域の歴史について、知れていないと回答する生徒が1割未満になっている。これは、その地域に関する遺跡の紹介や本物の遺物を目の前にしたときの感動体験をクラス全体で共有できたことが大きな要因であったと考える。生徒の感想の中には、自分の住む地域にも古墳があることを知らなかったのが驚いたという記述があり、普段の生活の中では気づかない地域の一面に気づけたと共に、教科書の内容といった生徒にとってかけ離れた存在のものが身近にあることで、理解しやすい側面もあったと考える。

また、③と④から知識が深まったことによって自分の住む地域の歴史に興味を持つ生徒が増加していることもわかる。授業前では、自分の住む地域の歴史に興味を持っている生徒と持っていない生徒の割合は拮抗していたが、授業後に興味を持てなかったと回答した生徒はわずか1割ほどであった。つまり、授業を通して、自分の住む地域の歴史について知り、その価値に気付いたことによって、興味を持った生徒が増加したと思われる。

⑤と⑥は授業後のみ質問した。図5の「地域の文化財を探してみたいか。」では、6～7割の生徒が探してみたいという回答であった。そして、図6の「歴史文化遺産を守り、未来のために残す取り組みがあれば参加した

と思いますか。」に対しては、9割の生徒が参加したいという前向きな回答であった。このことは、授業内で埋蔵文化財の価値や重要性を自身の考古学の経験を交えて授業を展開したからだと推測する。やはり、生徒にとって、本物に触れることや、自身の発掘調査の経験談は、埋蔵文化財に対する見方や考え方を変えてくれるものだったのである。図6の未来に残す取り組みに参加したいという回答が多い所を見ると、生徒の行動変容にも繋がったのかもしれない。

一方で、授業後のアンケートの最後には、授業に対して自由に感想を記述させた。生徒の感想は、大きく4つに分類できた。それは、興味をもつことにつながったもの、埋蔵文化財の価値気付いたもの、授業に対するもの、その他である。以下で分類ごとに生徒の感想を示す。

- 興味をもつことにつながった感想
 - ・何気なく見ていた古墳や埴輪、土器にも一つ一つ意味があって作られているということが知れてとても興味をもった。
 - ・自分の住む地域にある文化遺産や世界遺産を紹介してくれて興味を持てた。
 - ・古墳や、土器、埴輪などを直接みてみたいと思った。
- 埋蔵文化財の価値に気付いた感想
 - ・とても昔の古墳などが、今でも残っていることはとてもすごいことだなと思った。
 - ・大昔の、今みたいな技術がない時に今ある大きな建造物にも負けない、大山古墳のような大きさのものをつくるのがすごいと思った。
- 授業に対する感想
 - ・生徒が考えさせられるような質問をしてくれたことで、いつもより、授業が面白く感じた。
 - ・周囲の人と相談したり、意見を言い合ったりすることで、楽しく授業に取り組めた。
- その他
 - ・自分の住む街に古墳があることを知ったのと、どうして古墳が今でも残っているのかを考えた。

生徒の感想から、自分の住む地域の埋蔵文化財に触れることや、文化遺産を紹介したことで歴史を身近に感じることができたと考えられる。

次に、埋蔵文化財の価値に気付いた感想では、授業内で過去を現代の視点から捉えようとしたことで、過去に作られたものや文化が今でも残っている重要性に気がつくことができた。しかし、世代を超えた様々な人々によって遺跡が守られ、残ってきたといったような「具体的な卓越さ」というよりは、1500年以上の前のものが奇跡的に残っているという「抽象的な卓越さ」である。そのため、文化財を守るために何かをするといった行動変容にまで至らなかったことが課題点である。ただし、守られてこなかった埋蔵文化財も多くあることも留意しなければならない。

他方で、授業の方法的な感想を記述している生徒がお

教科：社会科（歴史的分野） 学年：1年
 単元名「古代のタイムカプセルから未来を作れ」

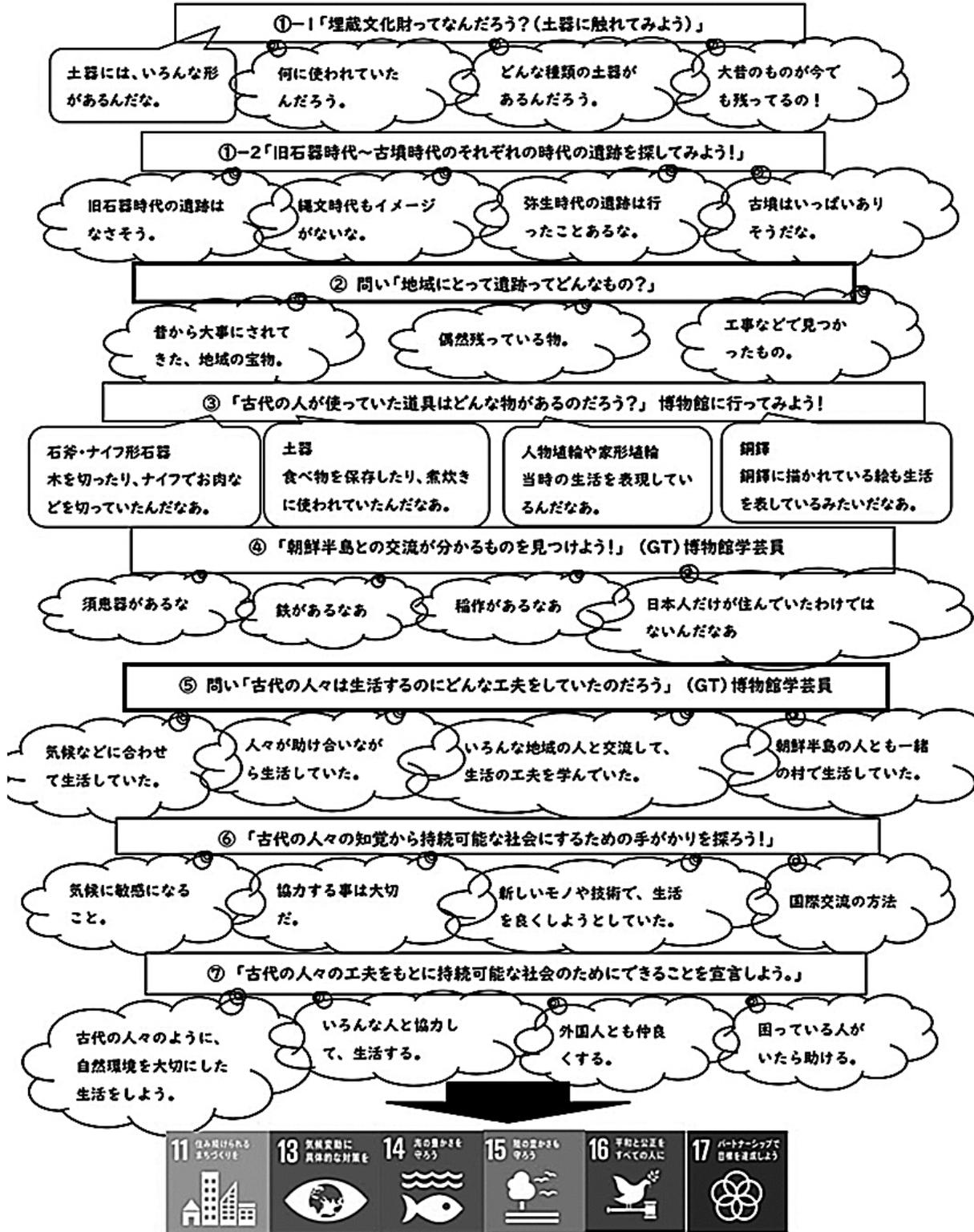


図3 単元構想案

り、考える問題があったことに加えて、問いを周囲と相談して自身の意見を再構築するというプロセスを楽しんでいると感じていた。このことから、ESD で育てたい資質・能力である、コミュニケーション力や、協働的問題解決力を育むことにつながっていたことがわかる。

6. 授業開発

これまでの、埋蔵文化財を活用した授業実践と筆者の授業実践を踏まえて、埋蔵文化財を活用した ESD 社会科の授業を提案して、まとめとする。

提案するにあたって、単元構想案を作成した。紙面の都合上、単元構成案の理論については、大西（2021）を参照していただきたい。

- (1) 単元名 教科
社会科（歴史的分野）
「古代のタイムカプセルから未来を作れ」
- (2) 単元目標
 - ・埋蔵文化財は、古代の人々の努力や工夫が反映されていることを知り、それが現代まで、人々の手によって守られていることを理解する。（知識・技能）
 - ・埋蔵文化財が、なぜ残されてきているのかを考え、持続可能な社会づくりの手がかりを見出せる。（思考・判断・表現）
 - ・古代の人々も現代人も持続可能な社会を望んでいることに気づき、現実の社会課題を解決するために、自分たちに出来ることを考え、行動できる。（主体的に学習に取り組む態度）
- (3) 学習展開の概要 授業時数 全7時間

本単元では、埋蔵文化財を活用して、古代の人々の努力や工夫、そして、思いを考えることを通して、持続可能な社会に向けた行動変容を促すことを目的とした。

認知考古学の成果から、古代人と現代人の根本は、同じ新人である以上は変わらないことが示されているため、より良く生活して行こうとする思いも共通しているだろう。事実、埋蔵文化財が主とする縄文・弥生・古墳時代においては、年代を数えると、現代よりも遥かに持続した社会を築いているのである。そこから、持続可能な社会づくりの知恵を学べるのであって、その知恵や工夫を埋蔵文化財は伝えている。特に、古墳は人・技術・情報の密接なやり取りという協力のネットワークがあったからこそ、全国に約16万基の古墳が存在しているのである。また、中澤（2021）が示した「持続可能な社会づくりの必須条件」である、国際交流・国際協力、技術革新・新システムの導入、能動的な市民の参加・協力があつたことが、古代人の思いや工夫を反映した埋蔵文化財を通して、考えることができる。

最後に、提案した中学校社会科（歴史的分野）における埋蔵文化財を活用した ESD 社会科の二つの意義を示す。

第一は、埋蔵文化財を通して、埋蔵文化財の価値のみならず、現代の社会課題を考えるきっかけになり得るところである。

第二は、これまでは、埋蔵文化財から古代の人々の思いや願いに着目されることはなかったが、認知考古学の視点を援用することによって、それが可能となり、古代人の持続可能な社会づくりの工夫に、生徒が共感し、現代の社会課題の解決に向けた行動化を促すことができる実践になると考える。

注

- 1) 文部科学省（2017），中学校学習指導要領（平成29年告示），p.17
- 2) 文部科学省（2017），中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編，p.83
- 3) 中澤静男（2021），ESD の授業づくり，京阪奈 情報教育出版，p.27
- 4) 田淵五十生・中澤静男（2007），「ESD を視野に入れた世界遺産教育—ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか—」『奈良教育大学教育実践総合センター紀要』，第16巻，奈良教育大学，p.65
- 5) 田淵五十生（2009），「世界遺産教育とその可能性—ESD を視野に入れて—」『国際理解教育』第15巻，日本国際理解教育学会，p.87
- 6) 中澤静男（2009），「世界遺産教育の構築—奈良市教育委員会における取り組み—」『国際理解教育』第15巻，日本国際理解教育学会，p.104
- 7) 文化庁（2007），「埋蔵文化財の保存と活用（報告）—地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政—」，hokoku_07.pdf (bunka.go.jp)，（2023年11月19日閲覧）
- 8) 松木武彦（2013），「認知考古学の課題と方法」『季刊考古学』，第122号，雄山閣，p.14
- 9) 長谷川真理子（2016），「進化心理学から見たヒトの社会性（共感）」『認知神経科学』第18号，認知神経科学会，p.108
- 10) 文化庁（2019），「『百舌鳥・古市古墳群』の世界遺産一覧表への記載決定について」，a1418407_01.pdf (bunka.go.jp)，（2023年11月19日閲覧）
- 11) 文化庁（2021）「『北海道・北東北の縄文遺跡群』の世界遺産一覧表への記載決定について」，93257501_01.pdf (bunka.go.jp)，（2023年11月19日閲覧）
- 12) 新宮済・中澤静男（2023）「文化財を活かした小学校における ESD 社会科創出の一方法—小学校4年生社会科「県内の文化財や年中行事」の実践から—」，『奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究

- 紀要』第1号, 奈良教育大学, p.19
- 14) 宮原翔太 (2023), 「縄文のむらから古墳のくにへ」, 『歴史地理教育』第953号, 歴史教育者協議会, p.24
 - 15) 山下貴史 (2023), 「弥生時代から古墳時代の授業づくり」, 『歴史地理教育』第953号, 歴史教育者協議会, p.30
 - 16) 斎藤勝明 (2018), 「埴輪から始める古墳時代の授業」, 『歴史地理教育』第875号, 歴史教育者協議会, p.22
 - 17) 浜田博生 (2013), 「見る古墳から造る古墳へ」, 『歴史地理教育』第803号, 歴史教育者協議会, p.41
 - 18) 斎藤勝明 (2011), 「弥生時代はどのように始まったのかー北部九州から考える弥生時代の授業ー」, 『歴史地理教育』第773号, 歴史教育者協議会, p.20
 - 19) 石原源一郎 (2011), 「誰が環濠を掘ったのか?ー地域教材としての唐古・鍵遺跡の教材化の視点」, 『歴史地理教育』第773号, 歴史教育者協議会, p.26
 - 20) 中尾敏朗 (2011), 「持続可能な社会とこれからの歴史学習ー現代の社会が「わかる」歴史学習に向けてー」, 『社会化教育研究』第113号, 日本社会科教育学会, p.21

- 21) 大西浩明 (2021), 「単元構想図の作成」『ESDの授業づくり』, 京阪南情報教育出版, p.66

参考文献

- ・中澤静男 (2023) 「古都奈良の文化財のSDGs教材開発に関する研究」, 『奈良教育大学ESD・SDGsセンター研究紀要』第1号, 奈良教育大学, p.51
- ・中澤静男・田淵五十生 (2008), 「地域学習としての世界遺産教育」, 『奈良教育大学紀要』第57巻, 第1号, 奈良教育大学, p.129
- ・永田暢之・岡崎誠司 (2017), 「主体的な価値観形成を目指す「ESD型社会科」の単元開発ー環境経済学の成果を生かした小学校地域学習の授業改善ー」, 『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要』教育実践研究, 第12号, 富山大学, p.77
- ・松木武彦 (2017), 「古墳時代の心と社会ー前方後円墳の認知考古学ー」, 『遺跡学研究』第14号, 日本遺跡学会, p.18